

終身宣教師への道

—Esther L. Hibbard の場合—

枝澤 康代

Abstract

There are many studies about the missionaries who were sent to Japan by the American Board of Commissioners for Foreign Missions. Most of these studies, however, are about those who came to Japan around the 1860s to 1900s, and unfortunately there are only a few about those who, like Dr. Esther L. Hibbard, came after that, entering environments where most of the early difficulties of mission work had already been settled and where quite good results had been obtained here and there. Hibbard came to Japan in September 1929, when Doshisha had already become a large educational enterprise and its relationship with the American Board was good after a time of their severe problems.

This paper aims to describe a part of Hibbard's life, focusing on her turning point of becoming a permanent missionary in April 1933. Accepting a permanent position was not an easy decision for her because the economies of both the United States and Japan were mired in the Great Depression and her family, especially her mother, eagerly wanted her to come home. Against such a backdrop, there must have been a drama involved in her final decision. I focused on turning points to see what kinds of dramas developed between the missionaries and the mission board.

The data I used in this paper are mainly from 1) the American Board's missionary documents stored in the Houghton Library at Harvard University, 2) Hibbard's personal correspondence to her family kept at the Wisconsin Historical Society Archives, and 3) other related materials. Please note this paper is a continuation of and supplement to my previous paper, "Miss Hibbard's First Year in Japan: The Start of a Remarkable Missionary Career," published in *Asphodel*, Vol. 48, 2013, pp. 96-124.

I. はじめに

アメリカン・ボード (American Board of Commissioners for Foreign Missions) が日本に派遣した宣教師に関する研究は既に多くあるが¹、主には1860年から1900年頃に来日した宣教師たちの初期の活動についてであり、Dr. Esther L. Hibbard (以後、ヒバード) のように、宣教活動が一段落した後に日本に派遣され、戦争中は帰米したが、戦後再び来日し、その生涯を日本に奉げた宣教師についての研究は少ない。

本研究は、ヒバードがどのような経緯で終身宣教師になったかを、当初の短期契約から終身契約へと変わったターニング・ポイントに焦点をあてて論じるものである。ヒバードが終身宣教師になったのは1933年であるが、当時の世界恐慌という不況の中で、日本の軍国主義が強まり始める時期に、さらには母が帰ってきてほしいと強く願うという事情を背にして終身宣教師に任命されることは、ヒバードにはそれらを乗り越える強い決意と後押しが必要であったと思われる。本論は、宣教師たちの残した往復書簡等の資料をもとに、ヒバードが決意に至ったターニング・ポイントを見出し、そこに宣教師とアメリカン・ボードの間でどのようなドラマが展開されたのかを明らかにしたい。

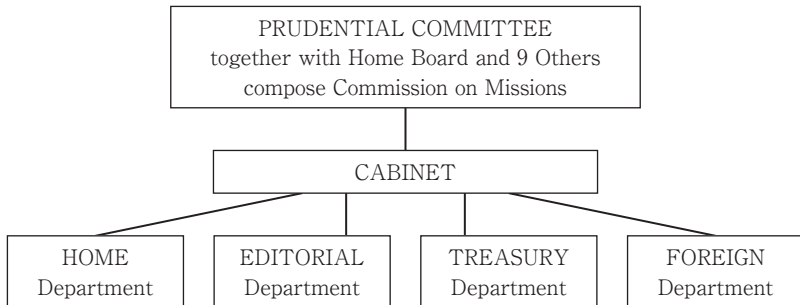
本稿では、ハーバード大学ホートン・ライブラリー所蔵のアメリカン・ボード宣教師文書²を中心に、ヒバードの自伝³及びウィスコンシン州立歴史協会アーカイブスに保管されているヒバード書簡⁴を比較検討しながら、その他の関連する資料を使用した。なお本論は、拙論“Miss Hibbard’s First Year in Japan: The Start of a Remarkable Missionary Career”の継続であると同時に、新資料を追加した補完論でもある。

II. アメリカン・ボードと宣教師派遣のシステム

アメリカン・ボード (以後、ボード) とは、アメリカのプロテスタントキ

リスト教海外伝道団体の一つであり、トルコ、インド、中国、日本をはじめとして世界各地に宣教師を派遣した北米でも有数の宣教団体である。教派に関しては、会衆派、長老派、メソジストなど諸教派が合同した超教派団体であったが、中核は会衆派であった⁵。ボードの宣教師には、宣教師（正宣教師）と準宣教師の二種類の宣教師があり、前者は定年のある終身契約であり、後者は、1年あるいは3年の短期契約であった。短期の場合には、賜暇（furlough）、支度金（outfits）、再支度金（refits）は与えられなかった。ボードで25年以上働くか、定年まで働いた場合は、名誉宣教師と呼ばれた⁶。

運営委員会（Prudential Committee）は、ボードの最高決議機関であり、すべての活動と宣教師やその他の関連する部門との連絡の責任を負っていた。運営委員会の組織図は、1929年は以下のとおりであった⁷。



（Chart of American Board Staff, Jan. 1, 1929 より）

各部門の業務分掌は次のように説明されている。すなわち、運営委員会は、各部署を代表する36人のメンバーで構成され、前述したように、ボードの国内も海外もその全活動に対して責任を負うものであった。キャビネット（Cabinet）は、各部の幹事、準幹事などで構成される執行委員会である。キャビネットの下には、4つの部門（Department）があり、「国内」（Home）、「編集」（Editorial）、「財政」（Treasury）、「海外」（Foreign）があった。

「国内」部門は、ボードで働く人物の提供、つまり、宣教師候補者の募集、選考、教育を行い、国内の年次総会の企画・実施などを扱った。「編集」は、主にボードの機関紙である *Mission Herald* の編集、発行を行うと同時に、記録と図書の保管も行った。「財政」は、ボード全体の財政を担当した。「海外」部門は、海外での宣教活動すべてを含み、宣教師との連絡は、海外部門の幹事が担当した。海外の宣教地はミッション (Mission) と呼ばれ、宣教師は各ミッションのそれぞれの任地 (Station)、例えば、ヒバードは日本ミッションの京都ステーションの同志社に任命された。

各部門は更に、委員会 (Committee) と小委員会 (Sub-committee) があり、種々の案件を協議した。各部には、幹事 (Secretary)、準幹事 (Associate Secretary) がおり、宣教師や宣教師候補者、また関連団体などとの連絡の責任を負った。幹事は宣教師とボードを結ぶ要の役割を果たし、宣教の現場で実施されることは、幹事を通して運営委員会に諮られた⁸。当時、海外部門の日本担当幹事の一人は、ルシアス・O・リー夫人 (Mrs. Lucius O. Lee、以後、リー) であった⁹。

以上のような組織をもつボードで、宣教師派遣はどのように行われたのであろうか。宣教師の選考・派遣に関しては、ボード運営委員会が最終決定権を持っており、吉田 (1999) によれば、そのプロセスは以下のように要約できる。

- 1) 日本で働く宣教師は、ボードの現地組織ともいべき「日本ミッション」(Japan Mission) に所属する。
- 2) 日本での伝道活動は、日本ミッションの会合 (年次大会、臨時委員会、支部委員会など) で討議され、決議される。
- 3) 人事は、財務、伝道方針などの案件と同様に、日本ミッションだけでは決定できず、ボードの承認が必要である。
- 4) 日本ミッションの書記がボードの幹事に日本ミッションの総意を伝え、幹事はその案件をボードの最高決議機関である運営委員会にかけ、審議

の結果を日本ミッションの書記に伝達する。

(吉田、1999、pp.1-7.)

「宣教師の働きはボードそのものである。ボードは、宣教師が任地で命を懸けて献身するその働きを促進するためだけにある。」(*Handbook for Missions and Missionaries of the American Board of Commissioners for Foreign Missions* (以後、*Handbook*), 1928, p.13) と宣教師ハンドブックに述べられているほど、ボードは手厚く宣教師の支援をした。派遣には、給与と宣教地への往復の旅費はむろんのこと、住宅費や医療費も補助した。終身宣教師の場合には、派遣のための支度金、現地での語学学習、そして賜暇もボードが負担した。特に、現地語の習得は重要視され、終身宣教師には、原則として最初の1年間を語学学習に専念するプログラムが組まれた。宣教師の選定は経費節減のため、ボードは現地にいる宣教師や、賜暇で帰米中の宣教師を優先的に選んで任命したようであるが、全くの新人も派遣した。この宣教師派遣プロセスは、発議から決定までかなりの時間を要した。そのため、幹事は1年以上前から現場の要望を聞き、人選を始め、現場も種々の情報を幹事に伝えて、最もふさわしい宣教師を雇おうとした。宣教師文書はその様子を如実に示しており、ヒバードの場合は、1928年8月から始まったようである (LOL to FBC, 1928.8.10)。

Ⅲ. 短期契約宣教師として同志社へ

ヒバードが3年の短期契約宣教師になる経緯は、自伝にも述べられ、また拙論でも取り上げたように、マディソン・セントラル高校での教員としての自信喪失の上に、自分と同じマウント・ホリヨーク大学卒業で、トルコと中国に派遣されたボードの独身女性宣教師から、教育宣教師としての充実した日々の体験談を聞いたことがきっかけであった¹⁰。ヒバードがいつ申込書を送ったのか、どのような志願書を提出したのか、いつ同志社への派遣が正式

に決定したかなどは、宣教師文書や家族への手紙の中にも書いたものが残っていないため不明であるが、宣教師の両親を持ち、子ども時代を日本で過ごしたヒバードにボードがどれほど期待したかは、幹事のリーの次の手紙に示されている。

私があなただの事を、若い宣教師としてどんなに貴重な方だと思っているか言い尽くせません。あなたには、宣教の現場を全く知らない家族には到底できないような、日本とそこでの仕事を知っておられ、あなたがこれから体験される種々の事柄を理解し同情することのできるご家族がいらっしゃり、その日本で数年を過ごされるのですから。

(LOL to ELH, 1929. 6. 27)

ヒバードが同志社に派遣されたことで一つ不思議なことは、ヒバードが「神戸女学院に行くつもりであったが、同志社に選任された」と言っていることである¹¹。その事情について、何が起こったのかを、リーと同志社女学校のフランシス・クラブ¹²及びアリス・ゲイン¹³との往復書簡から推測してみたい。

まず、1928年8月にボード幹事のリーはクラブに手紙を送り、同志社は次年度にどのような宣教師を望むのかを質問している。なぜなら、現在3年契約の宣教師は、任期を待たずに12月で退職すること、またデントン¹⁴が既に名誉宣教師となっており、海老名総長からもその後継者として新人宣教師を送ってもらいたいとの手紙が届いていたからである (LOL to FBC, 1928. 8. 10)。それに対するクラブの返事は不明であるが、11月に再びリーから手紙があり、1929年秋に日本に派遣する宣教師は、神戸女学院に終身1名、短期1名、伝道(教会)に2名(身分は不明)、同志社に1名(終身か、終身を考えている者)の予定であると知らせてきた (LOL to FBC, 1928. 11. 6)。1929年3月には、リーはゲインに、同志社の新しい宣教師としてマンスフィールド¹⁵を予定していると伝えている (LOL to AEG, 1929. 3. 14)。それに対して、1929年4月9日のクラブのリー宛の手紙は、「新しい短期契

約の教師の話聞いて嬉しいが、私たちが切実に欲しいのは1年以上の長期契約の教師です」と、3年契約か終身契約の教師が与えないことを残念がっている（FBC to LOL, 1929. 4. 9）。その後、宣教師たちが日本に出発する直前の8月に、長い手紙がゲインからリーに送られたのであるが、それは、同志社はなぜマンスフィールド¹⁵を選ばなかったのか、最終段階で変更するようでは今後問題であるというクレームが、カーブ夫人¹⁶からリーに送られたことについての、ゲインの釈明の手紙であった。ゲインは、決して他意があったのではなく、マンスフィールドは1年契約であったが、ヒバードは3年契約であったため、カリキュラムを考えると、どうしても3年は同志社に居てもらわなければ困るからマンスフィールドを選ばなかったのだと断りをしている（AEG to LOL, 1929. 8. 5）。つまり、1929年4月初旬の時点では、同志社女学校には1年契約のマンスフィールドが予定されており、その後3年契約のヒバードの名前が上がり、同志社はヒバードだけを採用したということになる。

一方、神戸女学院に英語教師の空きがあるということで教育宣教師に応募したヒバードにとって、最終任地が同志社になったことは大きなショックであったらしく、あとあとまで、「本当は神戸女学院に行くつもりだった」ということを繰り返し語っている。しかし、来日2か月後の母への手紙には、ゲインと一緒に神戸女学院を見学に行き、初級英会話の授業が完全に英語で、日本語を使わない教授法でおこなわれ、少人数クラスや素晴らしい施設とキャンパスを見たが、自分は神戸女学院に移りたいとは思わないと述べている。なぜなら、プライバシーのない教員寮の生活や同志社よりも保守的な学園の雰囲気は自分には合わないし、神戸に任命されなかったときは、どうしたらいいのか分からないほど失望したが、現在のクラブとゲインとの一軒家の共同生活は、3人の仲がとてもよく、お客を迎えたり、行ったり来たりを自由にできることが非常に嬉しいからだと説明している（ヒバード、1929. 11. 4）。

このように、同志社へ任命されるについては一悶着あったのであるが、来日前にボストンで行われた新任宣教師のための事前準備大会に出席して、宣教師としての自覚を深め、将来の働きについて意気軒昂になった様子がリー宛の手紙に記されている。ヒバードは、デフォレスト¹⁷の著書、*The Leaven in Japan*¹⁸を読み、日本女性の中で働くとはどういうことかというイメージをしっかりと持ったようである。また、同志社については、デフォレストの本が1922年（ママ）に出版されたので同志社は海老名総長となっているが、他の点はあまり変わっていないだろうと述べ、「はやく働きたいという気持ち」が2倍強くなった」としている。同時に、ボストンの大会は、はじめてヒバードに宣教師とは何かを自覚させ、困難な中でも「共に戦う仲間」との連帯意識（comradeship）を高めさせたようである。（ELH to LOL, 1929. 6. 18）。

IV. 終身宣教師への道

こうしてヒバードは、ボードの短期宣教師として、1929年9月14日に神戸に上陸し、すぐに同志社に着任した。最初の1年はまさにバラ色であった。子供時代に覚えた日本語は少しは通じ、20年前に東京及び大連 YMCA で働いた父母の友人、知人はまだ健在で、ことあるごとにヒバードに声をかけ、食事や旅行に誘ってくれた。父母を見ていて、宣教師としての過ごし方にも違和感はなかったに違いない。授業も、授業のあとの課外活動も、宣教師仲間との付き合いも、全力で楽しんだ様子がうかがえる¹⁹。1929年12月の家族あての手紙には、「ホームシックにかかったことがないほど、この環境になじんでいる」（ヒバード、1929. 12. 15）と書いている。マディソンの高等学校で生徒たちに受け入れられずに悶々としていた頃と比べると、同志社での生活は非常に充実した日々であり、3年の契約が終われば、終身宣教師となって日本で長く働くことを考えたとしても不思議ではない。ヒバードは、新米宣教師としての困難にぶつかりながらも、それを乗り越え、日本上陸時

に感じた「私は帰ってきました。これこそ私の国です」(自伝、p. 56)の思いを深め、日本文化と日本文学への限りない興味と愛情を失いたくないと願っていた。しかし同時に、母が彼女に側にいてもらいたいと強く思っていることを知っていたので、故郷に戻って教員として働きたいとも願っており、日本とマディソンの間で心は揺れていたようである(ヒバード、1930. 9. 14)。

1. 終身宣教師になる決意を促す要因

1) 同志社での高い評価

同志社は、前述したように、ヒバードの赴任の最初から、できれば終身宣教師であってほしかったのであるから、その素晴らしい働きぶりを見て、3年後に終身になってもらいたいと期待するのは当然であったと思われる。ヒバードの名前が、終身宣教師候補として初めて宣教師文書に現れるのは、筆者の調べた範囲では、来日して半年後の、1930年3月19日付けのリーからグインあての手紙からである。その手紙には「ダウンズさん²⁰の手紙によると、ヒバードさんは終身宣教師に応募することを真剣に考えているとのこと、それをとても嬉しく思っています」(LOL to AEG, 1930. 3. 19)とある。

その頃、グインとクラブは、あいついでリーに手紙を送り、ヒバードの終身契約について言及している。グインは、短期契約のあとアメリカに帰米中であった体育の宣教師が日本に戻らないことを正式に知ったとき、それなら同志社女子部に必要なのは、英語を教えることのできる宣教師であると述べている。さらに、同志社女子部が、最初は家政科の教師を、次に体育の教師を、そして今、英語の教師を求めるのは節操がないように思えるかもしれないが、家政科から体育への変更は、学校がデントンに引き続き教えるように依頼したからであり、体育から英語への変更は、体育なら誰でもよいというのではなく、現在帰米中のその人でなければ意味がないからだとし、その手紙の最後に、「私たちはヒバードさんが終身契約の先生になってくれることをとても望んでおり、ヒバードさんとカーブ夫人には英文学を、もう一人

の先生には、英会話と英作文を担当してもらうつもりです」と事情を説明している (AEG to LOL, 1930. 3. 27)。

同時に、クラブは、3月29日付けのリーあての手紙で、次のように述べている。

ヒバードさんはこの仕事に大変満足している様子で、また非常に有能な先生であると認められていますので、私たちは彼女が終身宣教師に応募してくれることを強く望んでいます。彼女もそれを真剣に考えているようです。彼女のお父さんは、急いで決めることを望んでいませんが、彼女の心はその方向に向いているようです。私たちは彼女と一緒に楽しく仕事をしています。彼女の感じの良い性格は、休息とレクリエーションが必要なこの家には大きな強みです。

(FBC to LOL, 1930. 3. 29)

この後、リー、グイン、クラブの往復書簡や、ミッションの議事録には、ヒバードに終身宣教師になってもらいたいという文言が繰り返し現れる²¹。実際、1930年6月に有馬で開催された日本ミッションの年次総会で、ヒバードに終身宣教師になるように要請することが正式に決定され、ボードの運営委員会に報告されることになった。その報告はクラブが書いたのであるが、同志社女学校に派遣される宣教師について、次のように述べている。

[同志社女子部に必要な宣教師のリストを示したあとに:]

4人の女性教師のリストの内、3人は現在(同志社で)働いていますが、ヒバードさんは今は契約教員です。松田校長²²も大工原総長²³も、日本ミッションに対して、彼女を終身宣教師に任命するよう既に文書で申し入れています。彼女は申し分のない仕事をしていまして、宣教師としての学外の仕事も、英語教師と同様に、喜んで、効率よくこなしてくれています。彼女は今学期中に終身宣教師に応募することを真剣に考えていますから、ミッションは同志社の要請を認め、ボードの運営委員会に、彼女が終身宣教師に応募した時には好意的に考えるよう伝えました。

(FBC to LOL, 1931. 6. 7)

こうして、同志社で高い評価を得、今にも終身宣教師に応募しそうなヒバードであった。

2) ヒバードの家庭環境

ヒバードは、幼い時から宣教師の家庭の雰囲気にもまれていた。両親が1902年から1914年まで YMCA 主事として日本（満州を含む）へ派遣され、日本のキリスト者の育成と社会事業支援のために活躍した²⁴というだけでなく、父のすぐ下の弟のダレル・ヒバードもギリシャ YMCA の主事として、宣教師と同じ仕事をしていた。また父の弟は二人とも日本で英語を教え、末弟のクラレンス・ヒバードは新聞社の日本への特派員もしたので、日本をよく知っており、ヒバードが日本で働くことへの抵抗は、家の中にも親戚の中にもなかったのではないかと想像できる²⁵。また、母方の祖母であるエリザベス “リビー”・C・ローウェル²⁶は、熱心なクリスチャンホームであるチェイニイ家の出身であり、母の従兄（祖母の兄の次男）のラルフ・チェイニイ²⁷も、その息子のウィリアム・チェイニイ²⁸も YMCA に深くかかわった。ラルフとウィリアム父子は共に、YMCA が創立した大学であるスプリングフィールド大学で教鞭をとり、秘書科長、学生部長をそれぞれに歴任した。この大学のチェイニイ・ホール²⁹は、二人のチェイニイの貢献を記念して命名されたものである。また、ラルフの兄のベンジャミン³⁰は牧師であったし、祖母の弟のラッセル³¹も牧師であった。加えて、ヒバードにとって曾祖母にあたるマーサ・チェイニイ³²の死亡記事には、彼女はウィスコンシン州ジェーンズビルの開拓時代からの熱心な会衆派教会の会員であり、ゴスペルシンガーとして夫と共に州の各地を回って教会活動に貢献したと紹介されている。ヒバードの歌が上手なのは、この曾祖母ゆずりなのであろう。

3) 女性が自立できる職業としての宣教師

ヒバードに終身宣教師を受け入れさせたもう一つの要因として、宣教師という職業があると思われる。ヒバードは学生時代に宣教師になることは全く

考えていなかったと述べているが³³、教員としての道に自信がなくなったとき、宣教地では熱心な生徒がおり、自分の教えたいことが教えられるというだけでなく、経済的に自立できることは、魅力的な職業としてヒバードに映ったのではないだろうか。しかも尊敬する父と母が歩んだ道であり、その後継者になることに躊躇はなかったと思われる。

小桧山（1999）は、19世紀後半の日本に派遣された長老派海外伝道局の婦人宣教師を調査し、大半が大学、師範学校、セミナーで学び、当時の女性としてはかなり高学歴であったことを示しているが、マウント・ホリヨーク大学卒業生として、多くの同窓生が素晴らしい実績を残している海外宣教師になることは、ヒバードには受け入れやすい選択肢であったと推測できる。特に、家族に負担をかけたくなかった彼女には、経済的に自立できることと、当時の理想的な女性像、つまり「有能だが控え目で、積極的だが利己的でなく、実際のだが詩情にあふれたやさしい女性」を具現し、「アメリカの中流女性が目標とした淑女（lady）の姿」を示すことができることは魅力であったはずである³⁴。

経済に関しては、ボードの日本に派遣された独身女性宣教師の給料は、1930年の日本ミッションの予算では、固定給が年額 \$ 1214 であり、それに医療手当、教材等手当、住宅手当、住宅補助費が、各人の必要に応じて年額で加算された。ちなみに、1930年のヒバード、クラブ、グインに実際に支払われた額は以下の通りであった³⁵。

ヒバード： \$ 1214 + 医療 \$ 35 = \$ 1249.-

クラブ： \$ 1214 + 医療 \$ 23.50 + 教材 \$ 100 = \$ 1337.50-

グイン： \$ 1214 + 医療 \$ 35 + 教材 \$ 120 + 住宅 \$ 175 + 住宅補助 \$ 100 =
\$ 1644.-

*住宅手当は、固定額であり、1軒につき代表者一人にまとめて支払われ、修繕費や保険など住宅に関する費用のすべてが含まれた額であった。

1930

Occupation	Income
Average of all Industries	\$ 1388/year
State and Local Government Workers	\$ 1517/year
Public School Teacher	\$ 1455/year
Building Trades	\$ 1233/year
Medical/Health Services Worker	\$ 933/year

*住宅補助費というのは、1軒家に一人で住んでいて、住宅の出費が異常に多かった時に、申請がある場合に、\$100.-が支払われた。

この額が、アメリカの一般の給与に比べて安いのか高いのかは、物価やその他の要因によって一概には言えない。参考までに、アメリカの1930年の職業別収入に関する統計³⁶を上記に示す。

これを見ると、ボードの独身宣教師の給料は、アメリカの公立学校の教員の平均給料よりは少し安いようであるが、当時の為替がドル対円は2:1であったことを考えると、贅沢はできないが、余裕のある生活ができたと思われる。事実、ヒバードは、来日1年後には、「私はこの1年で320円、給料の1割強を貯めました」と父に報告している（ヒバード、1930. 9. 14）。

また、理想の女性としての生き方に関しては、ヒバードにとってはまさに心地のよいものであったに違いない。幼児からキリスト教的な倫理観の中で育った彼女にとって、「異教徒の救済、旅と冒険、忙しくも充実した日常、女性としての調和的結実」の生活を実現させていたのだから³⁷。

2. 終身宣教師応募の決意を躊躇させる要因

このようにヒバードには終身宣教師になる条件はそろっていた。いつ応募してもおかしくない状態で、リーなどはジリジリして待っていた。事実、しびれを切らしたリーは、手紙のやり取りに時間がかかることもあって、ヒバードの母に手紙を送って、終身契約について家族はどう考えているかを確

かめたほどである (LOL to ELH, 1932. 1. 21)。ヒバードが、終身宣教師になることを明確に意志表示をしたのは、1932年7月 (ELH to LOL, 1932. 7. 3) であるが、申込書を送ったのは、その年の9月であり、運営委員会で審議されたのは、翌年の1月であった。そして正式に決定されたのは、1933年2月であった。ヒバードが日本に戻る船にギリギリに間に合う日程であり、ボードは電報で決定を知らせなければならなかった。なぜそのように時間がかかったのか。それには家族の事情、ヒバード自身の終身宣教師になるにあたっての要求、及び時代の状況があった。

1) 家族の事情

ヒバードの家族の事情というのは、母がヒバードを必要としていたことであつた。ヒバードの母は、大学に進学する若者が全国でたった2%という時代に、ウィスコンシン大学マディソン校を1900年に卒業した女性である。学生時代からYWCAで活躍し、卒業後も夫に従って日本に渡り、異文化の中で英語を教え、パイブルクラスを開き、積極的に教会活動をした人である。非常に独立心のある女性であつたが、体は強くなく、よく不調を訴えていた。更に1930年ごろは、母は反抗期の弟に手を焼いていたようである。ヒバードは、3年契約の1年目が終わる頃に、自分の将来について父の意見を求めたが、その手紙は弟に意図的に破られたことを父への手紙に明らかにし、相談したかつたのは、「私が(終身宣教師となつて)家からずっと離れてしまつたら、お母さんにどのような影響があると思うか」ということであり、「ラッセル(弟)が大人になろうとするとき、お母さんが憂鬱になりすぎないように、私を必要とするかもしれない」(ヒバード、1930. 9. 14)という事情があつたのである。そのあたりの事情は、ヒバードの父もリーに書き送つたらしく、ヒバードが最終的に終身宣教師に応募することを決心したときの手紙には、「私の父の手紙からもご存知のように、母の病気のために、私はこの時点でどうしてもアメリカに戻らなければならなかつたし、母が私

を必要としなくなるまで母のもとに滞在しなければならなかったのです」(ELH to LOL, 1932. 7. 3) と、1932年夏の帰国の積明をしている。

ヒバードは、もし終身宣教師となってアメリカから離れることになるとしても、一度はアメリカに戻り、母との約束を守りたかったのである。そして、その約束を果たすまでは、アメリカから離れることを決心できなかったのである。

2) 終身宣教師になるに際してのヒバードの要求

ヒバードは終身雇用になるにあたって、4つの要求を出していた。すなわち、1) 1932年夏に予定通りアメリカに帰ること、2) その後終身宣教師として1年の賜暇を取りたいこと、3) 賜暇の後、東京の語学学校に行き1年間日本語学習に専念したいこと、4) ヒバードの賜暇と語学学習の期間中、同志社に代用教員をボードから派遣してもらいたいことである (AEG to LOL, 1931. 12. 4; LOL to ESL, 1932. 1. 21)³⁸。しかし、この要求は、ボードには承認しにくいことであった。それは、短期契約宣教師には賜暇はなく、もし1932年の夏に帰米すれば、アメリカに上陸したその日からボードとの関係が切れるからである。そのことは、ヒバードもヒバードの家族も十分に分かってはいたが、1933年から終身宣教師になれば、短期契約の3年間も終身雇用の一部とみなされ、上記の希望がかなえられるのではないかと願っていた。そこで、何とかしてヒバードを終身宣教師として確保したいリーは、ヒバードに以下の代案を提案した (LOL to ESL, 1932. 1. 21)。

1. もし日本に戻りたいのであれば、帰米中に教えたり、他の仕事をしたりしない³⁹。
2. 夏に帰米後すぐに、終身宣教師の正式申込書を提出する。
3. そうすれば、1933年春、おそらく3月1日に日本に戻るという条件で、それまでのアメリカ滞在期間を賜暇として与える。
4. 代用教員の派遣は、賜暇に対しても、語学学習に対しても、運営委員

会が認めるとは思われない。同志社が教員体制を考慮して、考えるべきことである。

5. 東京での語学学習は、別の方法が考えられるのではないか。つまり、同志社の授業はパートタイムで教えることとすれば、負担も軽く、空いた時間を（今までしていたように、通信教育や個人教授で）日本語の勉強にあてることができるのではないか。
6. 語学学習は、もし語学学習委員会が、東京で語学学習に専念すべきだと認めれば、同志社はそのように必要な手配をするだろう。

このリーの提案はヒバードを悩ませた。ヒバードにとって日本語の勉強は何にもまして続けたいことであり、終身宣教師として1年間、語学学習に専念するという特権を捨てるのは忍び難かったのである。ヒバードは母に、リーに返事を書くのに「1時間も髪の毛をかきむしっているが、書けない」と書き送っている（ヒバード、1932. 2. 21）。

ヒバードは、最初の1年をフルタイムで仕事をしながら、自主的に、熱心に日本語の勉強をした。家庭教師だけでなく、通信教育でも日本語を学び、約5か月で初級の語学試験に合格したのであった。通信教育の費用を捻出するために、ボードに奨学金の申請をしたが、その際の手紙は、要約すると次のようになる（ELH to LOL, 1930. 9. 14）。

私の今までで最も幸福な生活は、ちょうど1年前に始まりました。最初の週からまるで家にいるように感じました。日本人との会話に詰まったとき、私がかつてに覚えた単語が最後に役に立ちました。そのときには、どれほどか安心し、この言葉は私にはまるで音楽のように響きますので、その素晴らしさを是非マスターしたいと決心しました。

私は昨年の2月から、1時間1円で、若い先生に週1回、教えてもらうようになりましたが、すぐに週2回になりました。この方の大変上手な教え方のお蔭で、私は7月の初めには初級コースを終えました。この調子で勉強を続けたいと思いますが、資金の面で問題があります。個人教授の分は自分で賄えますが、通信教育費用は賄えません。1学期で14

円もするのです。

そこで、ミッションを通して奨学金授与の願いを送りましたが、何の返事也没有せん。たぶん運営委員会は、私の終身宣教師になる決心を待っているのだらうと思います。私の気持ちは、確かにその方向に向いているのですが、正直なところ、両親との約束がありますので、1932年に帰米して相談するまでは終身に応募することはできないと思います。語学の勉強を今やめることは、今まで習得したものを失うことになります。もし運営委員会が支援できないということなら、他に方法はないでしょうか。

その結果、ヒバードは、終身宣教師にならない場合は返金するという条件で、50ドルの奨学金を受けることができた (HEH to LOL, 1931. 1. 28)。

このように日本語習得に熱心なヒバードは、リーの提案に対して、終身宣教師に保証されている「日本語学習に専念すること」を諦めることができなかった。語学学校に対しては、個人学習でも勉強できることを知っていたので、大して興味はなかったが、日本語に専念できること、勉強以外に何の仕事もなく、1年間を東京で過ごせることは大きな魅力で、すぐには手放せなかったのである (ヒバード、1932. 2. 21)。

3) 時代の状況

ヒバードは終身宣教師になる意志決定をなかなか出さなかった。それは、故郷のマディソンに戻って教員の職に就きたかったからでもあり、母との約束を守りたかったためであるが、そのことが大恐慌という嵐の中で、ヒバードの立場を次第に悪いものにしていった。

大恐慌の影響については、今回著者が調べた宣教師文書のリー、グイン、クラップ、ヒバードの書簡の中では、1930年になってから徐々に現れてくる。1930年2月のリーからグインに宛てた手紙には経済状態の悪化を、短期契約の宣教師で帰米中の女性宣教師の意見として紹介しているが、そこには、「ここ数か月のボードの経済状態を見ていると、また教会の中の人々の (献

金や寄付などの)態度と時代の流れを見ていると、今後海外伝道の予算は今までよりもっと厳しくなると思われ、新しい仕事が始まっても、資金難のため途中で挫折するかもしれないので、1930年夏に日本に戻るつもりはない」と日本への宣教師派遣を断る理由が示されている (LOL to AEG, 1930. 2. 19)。実際、ボードの一般予算の削減は1930年から徐々に始まり、財政事情が更に悪くなったボードは、宣教師に給与の自主的な10%のカットを要求し、5名の宣教師の引き上げ、また賜暇の1年の延期を求めるようになった⁴⁰。1933年夏に日本ミッションの経理のハケット (Harold W. Hackett)⁴¹が提案した1934年度の予算案では、独身宣教師の固定給は、\$ 1214 から \$ 1070 に削減されたのである (HWH to WCF & EW, 1933. 8. 7)。

もしヒバードがもっと早い段階で終身宣教師に応募していたら、1年間の賜暇も、1年間の日本語学校での学習も当然のこととして、堂々と可能であり、さらには、その間の代用教員の派遣も考慮されたかもしれなかった。事実、日本ミッションは、1932年7月軽井沢で開催された年次大会の報告書の中に、前年度中の日本ミッションの活動報告として、1931年11月28日に以下のことを運営委員会に要求することを決議したと報告している。

- (a) エスター・ヒバード氏をミッションの正式メンバー (終身宣教師) として任命するように求めること。
- (b) ヒバード氏の帰米中と語学学習の期間中に、彼女の代わりにの教員を可能な限り提供すること。

しかしボードは、1933年度は日本へは新しい宣教師を派遣しないと決定するまでになったのである (LOL to ELH, 1932. 3. 2; LOL to ESL, 1932. 6. 2)。

1932年夏にアメリカに帰ることにこだわったヒバードは、ボードの再三の終身宣教師への応募要請にも関わらず、1932年4月と5月に、「状況を考えたが、1932年夏にアメリカに帰るという予定は変えないし、それまで終身宣教師に応募することもしない」という手紙をリーに送ったのである (ELS to LOL, 1932. 4. 19; 1932. 5. 10)。

リーは、ヒバードの4月の手紙に対して、5月18日に「4月19日付けの手紙を受け取りました。それを一読した印象は非常な失望でした。私たちはあなたが終身宣教師に応募されると信じていましたし、この時期までにその任命が行われると思っていたからです」(LOL to ESL, 1932. 5. 18)と返信をしている。

これほどにボードに失望させたヒバードであったが、ボードはヒバードの意思を尊重し、辛抱強く待ったのである。

3. 終身宣教師応募への最後の決め手

1) 日本に戻れない恐れ

ボードは、1932年4月13日付けの書簡を全宣教師に送り、財政難の状況と究極の対応策、つまり、1933年には日本に新しい宣教師を送らないことを示したようである。残念ながらその書簡を入手できなかったが、当時のヒバードとリーのやり取りから内容を推察できる。ヒバードは、5月10日にリーに手紙を送り「4月13日付けのボードの手紙は、私に考え方を変えさせました」とし、終身宣教師にすぐに応募する準備があることを伝えた(ELH to LOL, 1932. 5. 10)。彼女は、日本を出発する前にボードと契約していないと日本に戻れなくなると恐れたのである。そのヒバードの手紙に対して、リーの6月の手紙は、「あなたの5月10日の手紙が今手元にあります。あなたはボードからの4月13日付けの手紙の『1933年には日本に新しい宣教師を一人も送ることができないだろうと見込んでいる』ということ、『あなたがこの7月にアメリカに戻ると、日本に戻る可能性を壊すことになる』と理解したようですが、そうではありません。4月13日付のボードの手紙は、あなたには直接の影響はなく、終身宣教師の特権の全部は与えられないかもしれないということなのです」と述べ、もしヒバードが終身宣教師に今の時点で応募したとしたらどうなるかを、以下の4点に要約した(LOL to ELH, 1932. 6. 2)。

1. ボードは普通の語学学習期間を与えることができるだろう。
2. ボードは、多分、全額とはいかないだろうが、支度金を出すだろう。
3. 現在、全メンバーに1年間の賜暇の延長を求めているのだから、あなたの賜暇も5年ではなく、6年になるだろう。
4. ボードの立場から言えば、あなたは急いで意思決定する必要はない。

それに対して、ヒバードは7月3日に返事を送り、「1933年4月の新学年に同志社に戻れるようにボードに応募したいと思います。私が望んでいたアメリカで職を見つけることは無理になりましたから、このことは私にはとても望ましいことです」と、アメリカに帰国する前に、終身宣教師になる決意を固めたのである (ELH to LOL, 1932. 7. 3)。

マディソンに戻ったヒバードは、9月7日の手紙で、「来年の4月の新学期の始まりに日本に戻るのが私の希望です。今は私の望みを妨害するものは何もありません。終身への応募について、すればよいことがあれば何でもします」とリーに書き送っている (ELH to LOL, 1932. 9. 7)。しかし、ボードの財政難は更に進み、新任の宣教師を送ることは、たとえ既に計画されていた人事であっても、非常に厳しいという状況になっていった。

2) グインの申し出

この様子を見ていたグインは、この年の初めに両親と一緒に住んでいた妹が病気のために死亡し、両親の面倒をみる必要性が出ていたのであるが、自分が引くことでヒバードが終身宣教師に任命されやすくなるのであればと考え、1933年春か夏に引退、あるいは長期休職とすることを申し出た (AEG to LOL, 1932. 10. 4)。

グインの妹は癌を患っていて、余命の長くないことは知られていた。したがって、もし妹が死亡した場合には、グインがアメリカに戻るかもしれないことは、クラブやヒバードにも知られていたが、実際は弟が両親の近くに住んでおり、どうしても戻らねばならないという状況ではなかった。しかし、

グインは自分が引退することでヒバードが終身として残るのであれば、その方がよいと判断したのである。そのことは、ボードにとっては渡りに船であった。

またこの時期は、クラブが賜暇を取る時期と重り、グインが引退することは、クラブにも大きな影響の出ることであった。グインは、自分の引退がヒバードの終身宣教師としての採用に良い結果を導き、またクラブの賜暇にも好都合になると考えた。彼女は10月4日のリー宛ての手紙に、「私は今のところ次の春（1933年春）に帰国を考えています。……（しかし）もし私が引退を1年延期すれば、1933年にクラブさんは予定通り賜暇を取ることができ、そうすれば学校には私がいることになって、二人ともが学校を留守にすることを避けることができ、またボードが各宣教師に賜暇を取るのを1年延期するように要請していることを実行しないで済むことになります」と、三者にとって都合がよいのではないかという提案をした（AEG to LOL, 1932. 10. 4）。一方、クラブはすぐにリーに手紙を書き、グインが引退を1年遅らせれば、クラブに賜暇を予定通り取らせることができると考えているようであるが、クラブは賜暇を6年目で取るつもりはなく、もともと1年遅らせて、7年目で取るつもりであったことを知らせ、それよりもグインが同志社を去ることは大変な痛みであると述べ、言外にグインの引退を阻止したいことを述べている（FBC to LOL, 1932. 10. 16）。

この状況の中で、リーは、1932年11月に、グリーンとクラブの両名あての手紙を書き、ヒバードの終身の応募書類をまだ運営委員会に出していないのは、それを出すことで厳しい財政削減を迫られている他のミッションから、大きな声でクレームをつけられる恐れがあり、新任の宣教師を送るべきでないという方向に話が進むからだと説明した。そしてこの手紙の中で、リーは決定的な文言を残している。すなわち「同志社女学校であなたたち3人が一緒にいてくれることは私たちの望んでいることです。しかし、現在の状況では、あなたたち二人（グインとクラブ）のうちのどちらかが引退しなければ

ば、新しい教員が任命される可能性は非常に疑わしいと思われます」と書いたのである (LOL to AEG & FBC, 1932. 11. 8)。これに対してゲインは12月に、「この春私が引退すれば、ヒバードさんの任命がいくらかでも保障されるということであるので、私は3月の学期の終わりで仕事を辞め、4月にアメリカに戻ることを決心しました」と、リーに引退決心の手紙を送ったのである (AEG to LOL, 1932. 12. 21)。

そこでリーは、ゲインが同志社を去らねばならないのは非常に残念であるが、せめてゲインがアメリカに戻る旅費をボードが支給できるように、また将来、同志社に戻ってくることができるように手配するつもりであることを知らせた (LOL to AEG & FBC, 1932. 11. 8)。その結果、ゲインの引退 (withdraw) は、一時的な撤退であり、完全にボードから離れてしまう退職 (resign) ではなく、「一時的にボード以外の仕事をしている宣教師という立場にある」という休職扱いになった。(LOL to AEG, 1933. 1. 16)。ゲインは、1933年5月中旬に同志社女学校を去ったが、戦後また来日し、病気で退職するまで同志社中学校で教え、同志社の理事も務めたのである。

それでも、その後ヒバードが運営委員会から正式に終身宣教師として任命されるのは簡単なことではなかった。1933年1月の運営委員会では結論が出ず、2月の会議まで待たねばならなかった。それほど新任を送ることが難しくなっていたのである。やっと1933年2月14日の運営委員会でヒバードの終身宣教師任命が決定され、すぐに電報が送られた (LOL to ELH, 1932. 2. 14)。

こうしてヒバードは、1933年4月10日に同志社に正宣教師として着任したのであった。

V. おわりに

ヒバードの終身宣教師就任にあたっては、世界恐慌の真っ最中の嵐の中で、ゲイン、クラップを巻き込んで、劇的なドラマが展開された。もしヒバード

が1929年に日本に来て大恐慌に遭遇していなければ、このドラマは起こって
 いなかった。もしヒバードが日本にあれほどの愛着があり、是非日本に戻り
 たいと願うのでなければ、このドラマは成立しなかった。もしヒバードが宣
 教師っ子でなく、ボードにとってぜひとも確保したい宣教師でないならば、
 ボードはここまで忍耐強くヒバードの決心を待ったとは思えず、このドラマ
 はありえなかった。そして、何より、もしグインが両親の介護があったとは
 いえ、ヒバード獲得のために同志社をやめて帰米するという決断をしなけれ
 ば、このドラマは完成しなかった。

歴史に「もし」はないが、一人の人物の歩みには、表に出ない種々の要因
 があり、見えざる神の手が働いたことがわかる。本稿では紙面の都合で、大
 恐慌のあおりを受けた日本経済の劣化や政治体制の軍国化など、その他多く
 の問題を乗り越えた歩みがあったことを述べるのが出来なかった。宣教師
 文書はまだまだ多くの情報を与えてくれているので、機会があれば今後も継
 続して研究を続けたいと思う。

註

1. 吉田亮 (1999) は、日本におけるアメリカン・ボードの宣教師研究は、ハーバード大
 学ホートン図書館所蔵のボード日本伝道関係文書の解説から始まったとし、それまでの
 研究成果について、一覧を巻末に提示している。(『来日アメリカ宣教師——アメリカン・
 ボード宣教師書簡の研究 1869~1890——』同志社大学人文科学研究所編、現代
 史料出版、1999、pp. 2-3)
2. 今回筆者が資料として使用したボード日本伝道関係文書は、筆者が2014年8月25
 日~9月3日までの間にホートン・ライブラリーで閲覧し、必要と思われる書簡をデジタル
 カメラで撮影し、後日タイプに打ち直して、判読したものである。

閲覧した資料は、膨大な宣教師文書の、ABC 16.4.1 日本伝道 (Mission to
 Japan) の項目の中の、v. 43~v. 70 (1920-1940) に収められているものの中か
 ら、ヒバードに関連する書簡である。書簡は書かれた年ごとに、書簡執筆者のア
 ルファベット順に綴じられており、綴じ代部分は特に読みにくいものが多かった。
 原資料の判読とタイプの打ち直しには、友人の Judie S. Crouse の助けを得たこ
 とをお断りしておく。

なお、宣教師文書の資料の提示方法であるが、アメリカン・ボード関連の先行研究にならって、略号を使用した。すなわち、例えば、ボード幹事の Mrs. Lucius O. Lee から Esther L. Hibbard への1929年5月1日の手紙は、(LOL to ELH, 1929. 5. 1) と表記した。

3. 自伝とは、『エスタ・L・ヒバード自伝——ある宣教師っ子の思い出』（『ある宣教師っ子の思い出』増補改訂版）、同志社女子大学、同志社同窓会出版、1999年を指す。以後、『自伝』と省略する。
4. ヒバード書簡とは、Carlisle V. Hibbard Papers, 1876-1954 : (Call number : Wis Mss QN ; PH 1556). The Archives of the Wisconsin Historical Society. を指す。これは、ヒバードの父カーライル・V・ヒバード（アメリカ YMCA 主事、ウィスコンシン大学 YMCA 主事）が1954年に死亡した折に、それまでに蓄積された YMCA 関係の書簡だけでなく、娘の家族あての手紙も一緒にして、遺族がウィスコンシン歴史協会に寄贈し、そのアーカイブスに保存されているものである。この資料の提示方法は、書簡執筆者名と日付とを、(ヒバード、1930. 9. 14) のように表記した。
5. アメリカン・ボードの説明に関しては、坂本清音著『女性宣教師「校長」時代の同志社女学校（1876年-1893年）上巻』同志社女子大学史料室編、同志社女子大学、2010、pp. 1-2 を参考にした。
6. アメリカン・ボードでは終身宣教師に、賜暇（原則1年の有給休暇）、支度金、再支度金を与えるという優遇措置があった。1928年度版の *Handbook* によると、それぞれは以下のものであった。1) 賜暇 (furlough) : 第1期は終身宣教師となって5年後に、第2期は独身者は第1期後の6年、妻帯者は7年後に、以後は全員が7年ごとに1年の有給休暇が与えられる。また往復旅費は、ボードが出してくれる。2) 支度金 (outfits) : 宣教活動に必要な物（衣類、文房具、生活用品など）を購入するために、任命されると同時に支払われる金額。妻帯者は、\$ 500 と1年目の終わりまでに \$ 150 の追加。独身男性は \$ 300、独身女性は \$ 350。独身者の追加金は、\$ 75 であった。支度金には、別途支払われた荷物の輸送費 (freight) と関税額、保険金も含まれ、荷物は妻帯者は6トンまで、独身男性と女性は3トンまで許された。ちなみに、保険金額は妻帯者 \$ 1000、独身男性 \$ 600、独身女性 \$ 700 であった。3) 再支度金 (refits) : 7年目の賜暇を取るときに、再支度金が支払われ、妻帯者は \$ 225、独身男性、\$ 125、独身女性、\$ 200 であった。輸送費も、90立方フィート（27.4立方メートル）に対して \$ 225 が同時に支払われた。
7. 本稿で示している運営委員会組織図は、ホートン・ライブラリー所蔵の宣教師文書 (ABC 81.1. Minutes of subcommittees, 1835-1949, v. 15, 1929-1933) の中の

- “Report of the Sub-Committee on Personnel and Salaries of the Prudential Committee of the American Board of Commissioners for Foreign Missions as presented at Cleveland, Ohio, January 22, 1929” に添付されたチャートを、筆者が簡潔に作成しなおしたものである。
8. 参照：“Report of the Sub-Committee on Personnel and Salaries of the Prudential Committee of the American Board of Commissioners for Foreign Missions as presented at Cleveland, Ohio, January 22, 1929.” (ABC 81.1. Minutes of subcommittees, 1835-1949, v. 15, 1929-1933)
 9. ルシアス・オ・リー夫人 (Mrs. Lucius O. Lee, 旧姓 Eula G. Bates)、アメリカン・ボード外国部幹事 (Secretary of the Foreign Department)。1929年の担当地域は、西アフリカ、中国、日本、ミクロネシア、メキシコ、ブルガリアであった。彼女の手紙は、LOL と略す。もう一人の日本担当幹事は、Wynn C. Fairfield と思われる。彼は *The Outlook for American Board Work in Japan* を1944年に出版した。
 10. ヒバードの来日の経緯については、拙論 “Miss Hibbard’s First Year in Japan: The Start of a Remarkable Missionary Career” 同志社女子大学英語英文学会誌『アスフォデル』48号、2013、pp.96-124 を参照されたい。
 11. ヒバードが最初神戸女学院に派遣されるものと信じていたことは、自伝やその他のところにも記されている。『自伝』、p.56、p.234 参照。
 12. フランシス・B・クラップ (Francis B. Clapp, 1887-1977)、ボード宣教師、パシフィック大学大学院修了、ドイツに2年間音楽留学、同志社女学校 1918-1941、同志社女子大学 1947-1967、音楽担当、同志社女子大学音楽科の基礎を築いた。書簡では、FBC と略す。
 13. アリス・E・グウィン (Alice E. Gwinn, 1896-1969)、アメリカン・ボード宣教師、ワシントン大学教育学部卒 BA 1920、MA 1937、同志社女学校 1925-1933、同志社中学校 1947-1963、英語担当、同志社理事 1961-1963、同志社大学名誉神学博士 1965年。書簡では、AEG と略す。
 14. メリー・フローレンス・デントン (Mary Florence Denton, 1817-1947) のこと。1888年に来日、同志社女子部の教育に多大な貢献をし、「同志社の宝」と呼ばれた。家政科で料理などを教えた。1929年7月4日に70才となり、ボードは当時、名誉宣教師となるデントンの後継者を探したが、実際にはデントンは引退せず、戦争中も京都にとどまり、90才で召天した。1929年に同志社に任命されたヒバードは、ある意味でデントンの後継者と言えるかもしれない。
 15. リリアン・マンスフィールド (Lillian Mansfield)、アメリカン・ボード宣教師、マウント・ホリヨーク大学1908年卒業、神戸女学院宣教師。

16. フローレンス・B・カーブ (Florence B. Cobb, 1879-1962)、アメリカン・ボード宣教師、スミス女子大学卒、同志社女学校 1911-1941、夫はエドワード・S・カーブ (Edward S. Cobb, 1878-1960)、アーモスト大学、ユニオン神学校卒、同志社 1909-1941、神学担当、同志社教会オルガニスト。
17. シャーロット・B・デフォレスト (Charlotte B. DeForest, 1879-1973) アメリカン・ボード宣教師として神戸女学院で教鞭 (1905-1940) をとり、第5代院長 (1915-1939) を務める。名誉院長。宣教師ジョン・デフォレスト (1844-1911) の次女、大阪生まれ、新島襄から洗礼を受ける。
18. この本の正式な題名は、*The Woman and the Leaven in Japan* である。著者はシャーロット・デフォレスト、1923年初版である。
19. 参照：“Miss Hibbard’s First Year in Japan: The Start of a Remarkable Missionary Career”、同志社女子大学英語英文学会誌『アスフォデル』48号、2013、pp. 96-124.
20. ダーリー・ダウンズ (Darley Downs, 1894-1969) デンバー大学、イリノイ神学校卒、同志社中学校 1919-1929、ボードの日本ミッション書記、同志社理事 1955-1956、1960、同志社大学名誉神学博士 1963年。
21. ヒバードに終身宣教師に応募してもらいたいという願望は、ボードにも同志社にも切実であったようだ。ヒバードの終身宣教師任命が1933年2月14日に正式決定されるまで、筆者の知る限りでは、リー、クラブ、グインの往復書簡には、1930年3月以降、16回の言及があった。その他のところでも、様々に言及されていたと思われる。
22. 同志社女学校校長の松田道 (1868-1956) のこと。プリンマー大学卒業。同志社女学校初の女性校長 (1922-30年、女専校長 1931-33) のほか、理事・同窓会長・寮務主事などを歴任した。
23. 同志社総長の大工原銀太郎 (1868-1934) のこと。九州帝国大学教授、第3代総長を経て、1929年に第9代同志社総長 (1929-1934) となった。土壌学が専門。
24. ヒバードの父カーライル・V・ヒバード (Carlisle V. Hibbard, 1876-1954) は、学生時代にジョン・モット (John Mott, 1865-1955、1946年ノーベル平和賞受賞) のYMCA 運動に共鳴し、ウィスコンシン大学学生 YMCA の会長を2年間勤め、卒業後も YMCA に就職し、1902年に日本に派遣された。日本では、東京YMCA で働くだけでなく、日露戦争に遭遇し、大連 YMCA の創設にかかわると同時に、日露戦争に派兵された兵士たちの日常生活の改善に貢献した。当時の児玉源太郎大将からの感謝の葉書がウィスコンシン歴史図書館のアーカイブに保存されている。ヒバードの母スージー・L・ヒバード (Susie L. Hibbard, 1887-1965) も、学生時代に YWCA の委員をつとめ、夫と日本に来てからは家庭でバイブルクラスを開いた。

25. ヒバードの父カーライルには二人の弟がいた。次弟のダレル・O・ヒバード (Darrell Osmer Hibbard, 1881-?) は、香川県高松市に1904-1907まで住み、その後ギリシャ YMCA 主事を1920年~1925年まで勤めた。末弟クラレンス・A・ヒバード (Clarence Addison Hibbard, 1918-1945) は、1909年~1914まで日本に滞在し、鹿児島や長崎の公立学校で英語を教え、新聞社の特派員としても活躍した。1930年よりノースウェスタン大学英文学教授、学芸学部長を勤めた。
26. エリザベス “リビー”・チェイニー・ローウェル (Elizabeth “Libbie” Cheney Lowell, 1847-1904) は、1875年にヒバードの祖父であるユージーン・W・ローウェル (Eugene W. Lowell と結婚しウィスコンシン州ジェーンズビルに住んだ。ヒバードの母のスージー・ローウェル・ヒバード (Susie ‘Jean’ Lowell Hibbard, 1877-1965) は、その一人娘である。なお、本稿のチェイニー家に関する情報は、ジェーンズビル歴史協会のアーカイビストであり、系図学 (genealogy) 専門家の Mrs. Sharyn Sheen より、個人的に受けたものである。
27. ラルフ・L・チェイニー (Ralf Loren Cheney, 1871-1964) は、オベリン大学卒業後、国際 YMCA 学校 (International YMCA Training School, 現 Springfield College) に進み、国際 YMCA 学校の社会学の教授となり、秘書科の設立に尽力した。
28. R・ウィリアム・チェイニー (R. William Cheney, 1909-1965) は、Springfield College 卒業後、Yale Divinity School で MA を取得し、Springfield College の教授となり、学生部長を勤めた。1965年、西アフリカのリビエラで心臓発作のため客死した。
29. チェイニー・ホール : Springfield College デジタルコレクション : <<http://cdm16122.contentdm.oclc.org/cdm/ref/collection/p15370coll2/id/5101>>
30. ベンジャミン・R・チェイニー (Benjamin R. Cheney, 1869-1906) は、ウィスコンシン州ペロイトの第二会衆派教会の牧師を勤めた。
31. ラッセル・L・チェイニー (Russell L. Cheney, 1850-1902) は、ウィスコンシン州ブルーミントンに済み、チェイニー牧師と言われていた。教会名は不明である。
32. マーサ・リー・チェイニー (Martha Lea Cheney, 1821-1902) は、1902年10月18日に死亡し、新聞に死亡記事が掲載された。記事はジェーンズビル歴史協会のアーカイブに残っているが、新聞社名、発行日は不明である。
33. 参照 : “Miss Hibbard’s First Year in Japan: The Start of a Remarkable Missionary Career”, 同志社女子大学英語英文学会誌『アスフォデル』48号、2013、p. 104.
34. 小松山ルイ著『アメリカ夫人宣教師 来日の背景とその影響』東京大学出版会、1992、pp. 152-157 及び p. 266.

35. アメリカン・ボード宣教師文書、ABC 16.4.1, V. 63, p. 240. “American Board of Commissioners for Foreign Missions, Salary Statement for Japan—Estimates 1930, 及び ABC 16.4.1, V. 63, p. 241. “American Board of Commissioners for Foreign Missions, Salary Statement for Japan—Estimates 1933., Treasurer’s comments by Harold W. Hackett, written on July 28, 1932.
36. アメリカ合衆国、職業別収入に関する統計、1930年、<http://usa.usembassy.de/etexts/his/e_prices1.htm>
37. 小松山ルイ著『アメリカ夫人宣教師 来日の背景とその影響』東京大学出版会、1992、p. 157.
38. ヒバードの要求に関しては、彼女が書いた文書は残っていない。グインからリーへの1931年12月4日付けの手紙と、リーからヒバードへの1932年1月21日付けの手紙から筆者が導き出したものである。
39. ヒバードは、帰米中に短期のパートタイムで教えたいと願っていることをリーに話していたので、もしヒバードの帰米が終身宣教師としての賜暇の扱いになれば、ボード以外のところで働くことは契約違反になることを指摘したのである。
40. 日本ミッションは、1932年1月5日に臨時委員会 (Mission Committee ad Interim) を神戸で開催し、ボードから1932年の一般会計予算について \$ 4,550 の削減要求が来たことへの対応を協議した。
41. ハロルド・W・ハケット (Harold W. Hackett)、神戸女学院の宣教師。日本ミッションの経理担当を長年つとめた。略号は HWH。なお、1933年8月7日の手紙は、ボード幹事のフェアフィールド (Wynn C. Fairfield/略号 WCF) とウィルソン (Eleanor Wilson/略号 EW) に宛てたものである。

引用文献

- American Board of Commissioners for Foreign Missions. American Board of Commissioners for Foreign Missions archives, 1810-1961, Houghton Library, Harvard College Library, Harvard University.
- American Board of Commissioners for Foreign Missions. *Handbook for Missions and Missionaries of the American Board of Commissioners for Foreign Missions: Enlarged and Revised Edition, Adopted by the Prudential Committee, 1928.*
- Cited from American Research Institute in Turkey, Istanbul Center Library, online in Digital Library for International Research Archive, Item #11118, <http://www.dlir.org/archive/items/show/11118> (accessed May 22, 2015).

- Edasawa, Yasuyo. (2013) “Miss Hibbard’s First Year in Japan: The Start of a Remarkable Missionary Career” 同志社女子大学英語英文学会誌『アスフォデル』48号、2013、pp.96-124.
- 同志社女子大学・同志社同窓会 (1999) 『エスタ・L・ヒバド自伝——ある宣教師っ子の思い出』(『ある宣教師っ子の思い出』増補改訂版)、同志社同窓会出版
- Hibbard, Carlisle V. (1954). “Carlisle V. Hibbard Papers, 1811-1954”. The Archives of the Wisconsin Historical Society, (Call number : Wis Mss QN; PH 1556).
- 小絵山ルイ (1992) 『アメリカ夫人宣教師 来日の背景とその影響』東京：東京大学出版会
- 坂本清音 (2010) 『女性宣教師「校長」時代の同志社女学校 (1876年-1893年) 上巻』同志社女子大学史料室編、同志社女子大学
- Springfield College. Springfield College デジタルコレクション <<http://cdm16122.contentdm.oclc.org/cdm/ref/collection/p15370coll2/id/5101>>
- United States Embassy. United States’ Statistics : Occupation and Income 1930 <http://usa.usembassy.de/etexts/his/e_prices1.htm>
- 吉田 亮 (1999) 『来日アメリカ宣教師——アメリカン・ボード宣教師書簡の研究 1869~1890——』同志社大学人文科学研究所編、現代史料出版

謝辞

宣教師文書の解読と原資料のタイプの打ち直しを手伝ってくれただけでなく、研究の全般にわたって貴重なコメントと適切なアドバイスを与えてくれた友人の Mrs. Judie Crouse に心からの感謝を申し上げます。